

説教の課題《誰に》
——《コミュニケーション》《トランスフォーメーション》の
観点から——

安村仁志

「説教」が成立するためには、文字通り、語られ・伝えられるべき《教え》があつて、その《教え》を説く者とその《教え》を聞く者がいることが前提となる。且つ、語られた《教え》が確実に伝わり、聞いたものがそのことによって《つくり変えられる（トランスフォームされる）》ことで完結する。

これは一般的な定義であつて、仏教を始めとして他の宗教の説教、さらには学校や家庭などでの説教にも通ずることである。その意味で、そうした「説教」に《基督教の》という限定が加わるときには、神のことばが、召された人間を通して、聖霊の働きの中でありのまま語られ・伝えられ、聞いた者が救われる・さらに福音の恵みに与るといふこととならう。さらに、《福音主義教会における》が付加されるとき 2011 年度の研究会議のテーマとなる。

今回の研究会議では、この枠組みの中で、説教が「コミュニケーション」と「効果（トランスフォーメーション）」の要素を念頭に入れていくつかの角度から吟味されたが、その場合この二つの要素をめぐっては、一般的な「伝達行為」に関する論点が参考になる可能性が生まれてくる。すなわち、説教をコミュニケーションの要素から点検・吟味する場合、コミュニケーションが成立する要件を探っていくことが必要であり、その結果として一般的なコミュニケーション行為をめぐるといふ論点も明らかになるのであつて、今回のテーマに参考になるということである。その際、コミュニケーションが完結するためには何らかの変化

が伴われるはずである。本論においては、こうした文脈において、説教に関し《誰に》が扱われる。論点を整理することから始めたい。

I. 「コミュニケーション」の観点から

「コミュニケーション」なる語には未だ的確な邦語がなく、communication がそのまま発音され使用されている。それはかなり複雑な意味合いが込められているからでもあろう。国語辞典の説明でも、「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと」(広辞苑)、「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行う。」(大辞林)などであり、後者においては前者と全く同じ定義をしたうえで、それを行う手段が示されている。共通する部分の“人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと”自体に、単なる一方的伝達行為ではないことが示されており、この行為には複数の主体があることが前提とされている¹。また、一定のアクションとリアクションが含意されている。つまり、人=A から人=B へ情報が伝達されること、その結果受け手(本論でいえば「聞き手」と送り手(同「語り手」)の間に「共通のもの」「心の通い合い」が生まれることである。

「語り手」と「聞き手」の関係に関する問題として、両者の《関係》、《双方向性》が考慮されなければならない。《誰に》ということでは、基本的に「語り手」側から見た問題となるが、その視点で整理してみたい。

A. 《誰に》をめぐる論点(伝達行為が成り立つ条件に関連した論点)

1. 対象(聞き手)があるか・ないかが大前提となる。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことの

¹ communication はラテン語 communicationem (主格形 communicatio) に由来する語で、それは動詞 communicare (“to share, divide out; communicate, impart, inform, join; unite, participate in”などの意) から派生し、“common”, “public”を意味する communis が元であることから“to make common”が原意となる。

ない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。“良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。”(ローマ 10:13-15)

①「語り手」がいるから「聞き手」が生まれるのか、「聞き手」がいるから「語り手」が語るのか

《宣教》ということでは前者であろう。

②「語り手」がいて、「聞き手」がいる

もっとも基本的な状況であるが、生活時間が多様化する今日の社会においては、「共通した時間」がもてるかどうか大きな課題となっている。

本論からすると、礼拝・集会で「説教」が行なえることになり、その場合に、「語り手は」「聞き手に」「何を」「どのように」語るか・伝えるかが問題になる。

③「語り手」がいても「聞き手」がいない

これに関しては、聞く者自体がいない場合と《求めて聞く》者がいない場合が想定されるが、広く現代の宗教の実態、それに基づく現代人の宗教に対する対応・感覚など現代の文化状況が関係する。

礼拝・集会で「説教」は行なえても、コミュニケーションとしてとらえる本論からすると、「説教」にはならない。

④「語り手」がいないが、「聞き手」はいる

正確には「聞きたい」と願う人がいるのに「語り手」がいないというケースで、もっとも深刻な問題である。一方、語り手がないということに関して、微妙なところでニュアンスが異なるが、聞きたいと願う人がいて、語る人もいるけれども、「真に」語る人となっていない(言い換えれば、聞く者の求めに応えられない、あるいは義務的・形式的に語っているにすぎないようなケース)という意味で「語り手」がいないということもあり得る。これは説教者の資質にかかわる問題である。

プロパーの語り手(牧師等の説教者)がいなくとも、何らかの形で代行する語り手(複数の可能性も)がいる場合には、形式的には「説教」が成立する可能性があるが、それはあくまでも代行者が行うものが「説教」である限

りにおいてである（「証」や「奨励」の場合は異なる）。しかし、こうしたケースは無牧状態に起こりえる。

⑤「語り手」がないから「聞き手」も生まれない

論理的には必然の結果であるが、今日説教者・伝道者の不足が叫ばれる状況（特に地方）において深刻な問題となりつつある。

本論からすると、礼拝・集会での「説教」の可能性がない。

2. 対象（聞き手）の姿勢に関し、コミュニケーションの要素を入れて整理する

a. 関心の度合い

①関心がある＝反応（応答）したいと思う状態が強い

語られることについて「語り手」と「聞き手」にかなりの程度共通の基盤がある場合で、本論からすると、聞き手としてはまず信徒が想定され、語り手（説教者）とのあいだに聖書の知識と信仰の共有があるということになる。つまり、語られることをめぐって「語り手」と「聞き手」に共通の基盤があるケースである。

また、求道者が「聞き手」である場合にも、語り手（説教者）とのあいだに聖書の知識（多寡の幅がある）の共有はそれほどないけれども、《人生》《生きる》ことにおいて道を求めているというアクティブな関心があることが想定される。

一方、語られることについて「語り手」と「聞き手」に相反する関係があり得る。聞き手が積極的無神論者のような場合で、聖書の知識がある・なしにかかわらず、意識的に神に否定的な立場、あるいは神を否定する思想を有するケースであるが、現在では遭遇することが珍しくなっている。また、他宗教の信徒・思想家でキリスト教・聖書に批判的な立場を有するものも想定され得る。

②特に関心があるわけではない＝反応（応答）についてニュートラルである場合

語られることについて「語り手」と「聞き手」の関係がさまざまな意味でニュートラルなケースで、反応の可能性はあり、その意味で可能性の掘り起しが説教において求められる。もともと積極的関心はないものの、人

に勧められて教会に来るような人が想定される。この場合、再び来る可能性は保証されないことからすると、「説教」の一回性を考慮する必要があるのではないか。

③関心がない＝当面、反応（応答）が期待できそうにないとみえる場合

寝てしまったり、帰ってしまうこともあり得たり、語られることについて「語り手」と「聞き手」との間に共通の基盤がほとんどないケースであるが、目覚めれば反応の可能性はあるので、聖霊の働きに期待して可能性の掘り起しをする説教となることが求められ、ここでも「説教」の一回性が考慮される必要があろう。

b. 対象（聞き手）の状況、《場》の問題について整理する（《メディア》の問題も関係する）

①「聞き手」が「語り手」の前にいる＝対面型、face to faces

「聞き手」の多寡により《場》の大きさも変わるが、概ね、「語り手」は「聞き手」がどのような様子で聞いているかをダイレクトに見る・感じることができる。

②「聞き手」が「語り手」の前にはいない

「語り手」にとって「聞き手」がバーチャルな面もある。本論からすると、テレビ・ラジオ・テープで視聴している人たち、パソコンで視聴している人たち、「語り手」の書いたものを読む人たち、聞きたくても聞きに来れない人たち（病気・高齢などで）などが想定される。聞き手、読み手はその場にはいないため、何らかの要素により視聴が中断されることがあり得るので、集中性が保たれるかについては保証がない²。但し、メディアによっては、繰り返し聞き・読むことができる。また、聞くこと、読むことにおいて個人的自由或いは自発性が比較的担保されやすい面があり（聞きたくない・読みたくないものは聞かない・読まない）、その意味では一定の効果が期待され得る。《コミュニケーション》ということであれば、「説

² これらのケースについて、ロイドジョーンズは説教者と会衆との間に直接的接触がないことを理由の一つに入れて否定的に見ている。『教会とは何か』（いのちのことば社、2005）、59頁

教」の臨場感がない、その場で反応を感じ取れない問題が一方にあり、他方書物よりは生の雰囲気を楽しむことができるとともに、繰り返し視聴できる可能性、後に反応が示される可能性の両面がある。

また、今日わが国は《超高齢社会》となっており³、移動に不自由な事情のある人たちが増えていく一方、メディアの発達によりある程度、否これまでとは異なった形で補われる可能性が拡大している。従って、そうした環境にある今日においては、誰が、誰に、どのように、どういった内容で説教するかに関し、本ポイントは重要なテーマとなり得るであろう。書物になった説教についてもこの範疇にある。

③対象の資質

聞き手の年齢、性別、国籍、キャリア、健康状態なども考慮されるべき要素といえよう。これらの「誰に」の対象としての聞き手の資質に関する要素は一般的に複雑に重なり合っており、實際上対象を特定した集会は別にして、礼拝の説教などでは男性—女性、若者—高齢者、日本人—外国人、健康な人—病弱な人が同一の場において聞いている⁴。これらの要素の多様性に完全に応えることは不可能に近く、それらを超えた聖霊の働きを祈る以外にはない。ただ、語り手の配慮は必須である。ジェネレーション・ギャップは、のちに触れるように、語彙、知識において顕著に表れ、通じない“ことば”、“概念”を多用することは慎むべきであろう。また、個別のフォローアップも考慮されるべきであろう。

³ 全人口に占める65歳以上の人口が7%を超えると「高齢化社会」、14～20%だと「高齢社会」、21%を超えると「超高齢社会」とされ、日本は2012年9月16日現在で総数が3000万人、比率にして24.1%に達した。

⁴ 聞き手がかなり均質であると考えられる大学（入試を経て一定の学力が担保され、且つ一定の動機をもって入学してくる学生が聞き手となる）でさえ、今日では様相が異なってきており、対応が求められている。すなわち、入試が多様化し入学時点で、資質の均一性が保てなくなっていること、進学率の上昇（50%を超え“ユニバーサル化”した段階にある）、偏差値に影響される度合いの高まりで志望動機・勉学に対する積極性の低下が大きな問題となりつつある。“リメディアル教育”と呼ばれる準備教育がおこなわれるところとなっている。

B. コミュニケーションが成り立つ前提としての《伝達行為》に関して《誰に》にかかわる論点

a. 伝達媒体としての言語に関連した論点

これはコミュニケーションの達成度と関係する。伝達は基本的に《言語》よってなされることを前提に、まず語り手と聞き手の言語が同じである場合を想定すると、以下の問題があがってくるであろう。

①語能力・言語感覚の問題

「語り手」と「聞き手」が《語彙力》や《言語による表現に対する感覚》において近いか・遠いかということである。今日、一般的には固有の日本語の語彙力が低下している。また、非常に顕著な現象として、表現の仕方がダイレクトになりつつあることである。間接的、比喩的表現は伝わりにくくなっているということである。

②用語の問題

「語り手」と「聞き手」の間に《ことばの時代性》のギャップがないか、それが大きい小さいかは常に問題になってきたことであるが、今日では情報革命によりギャップが生まれるスピードと幅は確実に増大している。和製英語、略語を含む新語が生まれ続けており、一般的には若い語り手と年長の聞き手の関係において問題が顕著である。日常生活のさまざまな面で年長世代は若年世代の使用することばを理解することが難しい（いつの時代にもあったことであるが、その程度は増してきている）うえ、同じ世代であっても主に活動する、あるいは所属する《場》特有の語が理解できない局面に遭遇することが多くなっている。そうした状況においては、「語り手」が「聞き手」の反応をつかみきれない問題が大きくなる。

③文化的背景の問題

「語り手」と「聞き手」の間に、話題・伝達方法などに関連して、《文化的背景や社会的な影響を受けている度合い》の差異がないか・あるか、小さいか・大きいかの問題である。

文化・社会の影響という要素は、大きな問題だと思われる。それは無意識のうちに受けているものであって、なかなか気付かないものであるだけに厄介な問題である。ことさら、今日はメディアの発達・多様性もあって、